

下村委員ヒアリング資料

【全体について】

- ・ビジョンの構成・内容は、よくドリルダウンされており、何をしようとしているのかがわかりやすい。
- ・コンセプトの部分が、これからということだが、市民の方が共感できるキャッチコピーができれば、ビジョンが目指す姿も伝わると思う。

【都市 OS について】

- ・様々な業種業態が入ってくると考えたとき、都市 OS が使いやすいものになっているかがポイントである。
- ・都市 OS を一旦整備してしまうと、そこに縛られてしまい、技術ファーストに陥ってしまいがちなので、そうならないよう注意する必要がある。また、都市 OS として選んだ技術が今後 10 年持つかどうかという視点でも考える必要がある。
- ・都市 OS は、様々な企業が参加しやすいシステムであることが重要。また、維持費や機能拡張に係る費用の負担、都市 OS のバグ対応についても予め確りと検討しておくことが重要。
- ・都市 OS にデータを入れるとどんな良いこと（メリット）があるのかを企業に対して確りと示すことが企業参画を促すことに繋がる。都市 OS にデータ集めることは非常に重要であるが容易ではない。
- ・都市 OS の実装にあたっては様々な課題はあるが、まずはやってみないことにはわからない。その意味で「アジャイル」の考え方には賛同する。

【スマート農業について】

- ・モビリティなど他の取組は、AI やドローンなどのデジタル技術を想起させる用語が使われているが、農業分野は「スマート農業」と概括的な表現になっている。（資料 1 P 22）
- ・農業を経済だけでなく、環境価値、社会価値から捉えている説明は評価できるが、「スマート農業」からもう一步踏み込んだフレーズがほしい。
- ・農業にとって環境情報（データ）は重要である。例えば「データを活用した農作物等の生産計画作成」など、データ利活用をイメージできる記載があると良い。

【推進体制について】

●企業が参画しやすい体制

- ・企業の参画を促進するためには、ワーキンググループの役割が重要である。大枠的なテーマより、テーマの内容が細かいほど、企業は参画しやすい。また、大枠的なテーマでワーキンググループが始まったとしても、議論するプロセスで個別のワーキンググループが新たに生まれることも想定される。
- ・技術をもっている企業が、社会実装するために「この指とまれ」方式で、様々な企業がぶら下がる形態もイメージもできる。小さな取組になるかもしれないが、立ち上がりは早いと思う。

●アジャイル型の取組について

- ・「アジャイル」そのものがチャレンジングで、変化への対応は早い一方、行政が関与するとなると進捗管理や統制の点において課題が出てくる。
- ・「アジャイル」は、未完成の状態ですぐ市場に出し、ユーザーの声を聞きながら改善を進めることから、「完成」がない取組と捉えることもでき、行政からの財政的な支援が入っている場合は特に評価が難しい。
- ・まずは取り組みやすいところから、「アジャイル」でやってみることが有効である。